

さらなる経済成長と企業成長を支えるエコシステム

—アジアの起業とイノベーション—

木村公一郎（開発研究センター）

聞き手：佐藤幸人（新領域研究センター）

長峯ゆりか（研究企画課）

—木村さんが主査を務められている研究プロジェクトも、いよいよゴール目前ですね。プロジェクトの始まりからここまで、そしてこれからをちょっと紹介していただきたいと思っています。

アジアの起業を通じたイノベーションが活発化してきた背景として、私たちはスタートアップの成長を支えるエコシステムの発展に注目しました。賃金が高騰し、これまでの労働集約型産業の発展が立ち行かなくなると、さらなる経済成長や企業成長のためにイノベーションを起こしていく必要があります。しかし、必要があったからイノベーションが起きました、というのでは、産業構造の転換が進まない問題や、中所得国のワナの問題が存在しないこととなります。そこで、私たちはシンガポールや台湾、中国のエコシステムを対象に、起業家がイノベーションを起こすための環境がどのように発展してきたのかをメンバーとともに議論してきました。

●ボストンから深圳へ

—スタートアップやエコシステムに関心を持ったきっかけは何ですか。

プロジェクトを始めるまえの2年間、私は



深圳のスタートアップが開発した3Dセンサー（撮影：木村公一郎）

海外研究員としてボストンと香港に滞在しました。その時、MIT 近くの大企業の会議室で、起業家が事業内容をプレゼンし、投資を募るイベントを見ました。また、ニューヨークのエンジェル投資家や、シリコンバレーのベンチャー・キャピタリストから、投資動向やニューヨークやサンフランシスコといった既存の大都市でも起業が盛んになっていることをうかがいました。そうしているうちに、新しい企業や産業を生み出すエコシステムに興味を持つようになりました。

ボストンに1年滞在した後、香港に移りました。ちょうどそのころ、中国で起業を通じたイノベーションを促進するための「大衆創業・万衆創新」政策が打ち出されたので、香港に移ったあとは、隣町の深圳をはじめ、北



京や上海の起業動向を見て回るようになりました。

しかし、スタートアップが増えているのは中国だけではなく。また、エコシステムそのものがベンチャー・キャピタル（VC）や政府、大学など多くの要素から構成されていますので、帰国後、各方面に関心のある研究者と、プロジェクトを組織しました。

●ハイスピードの変化のなかの連続と不連続——イノベーションやスタートアップと見ると、特に中国はそうだと思いますが、変化が急速なため、学術研究を行うスピードと大きなギャップがあるように思います。

そうなんです。ですので、このプロジェクトでも、スタートアップそのものに加えて、その参入と成長を支えるエコシステムに焦点をあてました。もちろん、エコシステムの担い手にも栄枯盛衰はありますが、私たちは個別のスタートアップだけではなく、もう少し長い時間軸で変化していくものを対象としました。

——急速な変化のなかでも、大きく変わった面と、それ以前から継続している面があるということですね。もう少し詳しく教えてください。

たとえば、中国の場合、大学や政府の起業支援やVC業など、エコシステムの構成要素の多くは、最近になって突然出てきたわけではなく、

1990年代ごろから長い時間をかけて充実・発展してきました。その点は継続性があります。そこに、第4次産業革命という事業機会を活かそうとする起業家や政府の動きがあって、今、エコシステムと呼ばれるものの規模がさらに大きくなり、今まで関係なかった担い手の参加も増えました。

スタートアップの増加とエコシステムの発展は相互依存の関係にありますし、サプライチェーンのあるところとないところなどといった、エコシステムを構成する各要素の強弱も地域によって歴史的に異なります。そのため、エコシステムの発展のスピードも、どのような特徴のあるエコシステムが発展するののかも、かなり多様なものになります。したがって、日本も含め、各地のエコシステムのあり方を考える際には、起業家の具体的な課題やニーズが何か、誰がそれを解決できるか、解決できるプレーヤーがいなければ他のエコシステムとどうつながっていくのか、ということに注目する必要がありそうだと思います。



アジアの企業環境を語る木村公一朗氏